

1. コロナ禍での RSNA 2021 参加記

黒川 遼 Division of Neuroradiology, Department of Radiology, University of Michigan/
東京大学医学部放射線医学教室

第107回北米放射線学会 (RSNA 2021) は、2021年11月28日(日)～12月2日(木)にシカゴのマコーミックプレイスとオンラインのハイブリッド形式で開催された。現地でも開催されるのは、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)パンデミック前のRSNA 2019以来であり、開催前からTwitterなどのSNSでは祝福ムードが漂っていた。現地参加者にはCOVID-19対策として、事前に指定のアプリ(図1)で二度のワクチン接種を証明する必要があり、会場内ではマスク着用が義務づけら

れた。また、COVID-19の検査も可能な体制が整っていた(図2)。

● COVID-19による影響

今回のRSNAでは、例年開催される日本人参加者向けのセミナーや情報交換会は予定されていなかった。RSNA 2021開催時点では、日本全体におけるCOVID-19新規感染者は60名(2021年11月28日:米国2万3950名、英国3万6507名、韓国3304名)と、他国と比較すると良好に感染をコントロールされていたと言えるが、米国イリノイ州からの

帰国時には帰国後10日目(11泊)の自主隔離を求められていたことなどから、ほぼすべての日本在住の放射線科医や企業関係者は現地参加を断念せざるを得なかった。また、RSNA期間中に自主隔離期間が帰国後14日目(15泊)に延長され、一日あたりの入国者数が制限されるなど、COVID-19防疫のための日本の水際対策は流動的であった。

● 参加者数および会場内の様子

主催者発表では、今回の現地参加者の人数は2万3000名弱。これは、前回現地開催されたRSNA 2019の4万7011名と比べて約半減となっている。急性腹症のセッションなど大会場で立ち見が出るほどのセッションもあったが、日中も閑散としているスポットが目立った(図3, 4)。ポスター会場に掲示されるEducation Exhibitの実物(紙)ポスターは、各セッションに最大でも2～3枚までしかなかった。海外組減少の影響か、Education Exhibitの数はRSNA 2019よりも400演題ほど少ない1521演題であった。Scientific Posterの数はRSNA 2019(904演題)よりも150演題以上増加した。企業ブースはRSNA 2019の740社から495社へと減少していたが、AI Showcaseへの関心は引き続き高いと感じた(図5)。

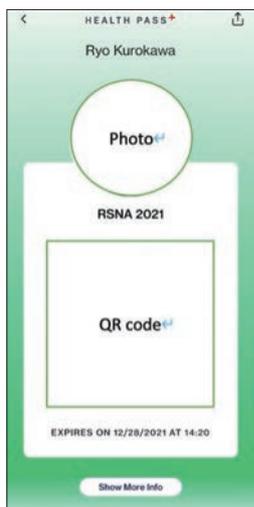


図1 CLEARの画面

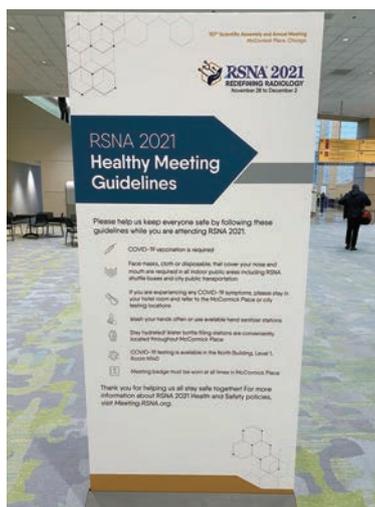


図2 会場の柱に掲載されたCOVID-19防疫のガイドライン



図3 日中のポスター会場



図4 Discovery Theater前

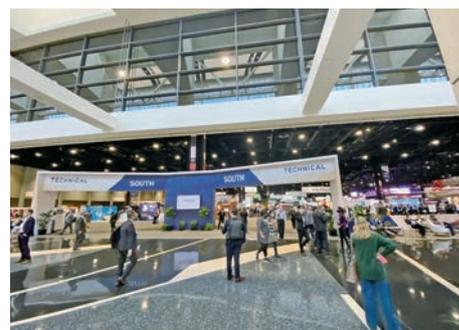


図5 AI Showcaseのある南側の企業ブース前



図6 Fun Run route



図7 Fun Run スタート5分前の様子

● 5km Fun Run

完全オンライン開催であったRSNA 2020でもバーチャル開催された伝統行事であるFun Runは、3日目の朝6時半からGrant Parkで開催された(図6, 7)。開催当日の気温は約4℃であったが、多国籍の243名が参加し、右手にレイクサイドの朝日、前方・左手には高層ホテル・オフィスビル群を望む冬のシカゴの美しい景色の中、5kmのFun Runを楽しんだ。日本人の参加者は筆者と、同じラボに所属している馬場 亮先生

(University of Michigan/東京慈恵会医科大学)の2名のみであった。

● Education Exhibitの受賞発表

4日目には、Education Exhibitの受賞発表があった。RSNA 2019ではMagna Cum Laudeを1演題ずつ発表するセッションがあったが、今回は予定されていなかった。受賞者には現地時間の朝7時30分過ぎに受賞を知らせるメールが一斉通知され、その後、Case of the Dayの正誤判定のメールが続い

て配信された。日本人研究者が筆頭の演題のうち、23演題(Magna Cum Laude 2演題, Cum Laude 5演題, Certificate of Merit 16演題)が受賞に輝いた。また、RSNA 2021閉会後の12月6日には、RadioGraphics誌のinvitationに選出された演題がDigital Presentation System (DPS)上で発表され、多数の日本人研究者が筆頭の演題を含む142演題が論文化の機会を得た。

* * *

いつもであれば連日のように、セミナーや情報交換会で多くの日本人参加者と過ごす機会があるのに、今回は会場で見かける日本人は留学中の少数名のみであり、その点は少し寂しいRSNAとなった。しかし、さまざまなSubspecialtyの講演や発表、教育展示、企業ブースでの機器展示、Case of the DayやFun Runなどのイベントといった、RSNAの多彩な魅力を毎日早朝から夕方まで楽しむことができた。また、コロナ禍のその先への期待がSNSや各演者の講演スライド、そして会場全体にあふれていた。ぜひ次回こそは、シカゴで多くの日本人参加者と一緒にRSNAを楽しみたい。

エキスパートによるRSNA 2021ベストレポート

2. 領域別技術と臨床の最新動向 中枢神経系

鎌形 康司/内田 航/斎藤 勇哉/高林 海斗

順天堂大学大学院医学研究科放射線診断学講座

今回のRSNAは、コロナ禍の影響でハイブリッド開催であったが、非常に盛況であった。ここ数年の傾向どおり、中枢神経領域でも人工知能(AI)に関連したセッション、演題が非常に多く見られた。中枢神経領域で筆者が注目したセッションの中から、特に興味深かった演題をいくつか紹介する。

● 学術研究のトピックス

“Science Session with Keynote: Neuroradiology (Brain: Cognition and Memory)” (SSNR01)のセッションは、どの演題も興味深かったが、特に

Keynote Lecture (SSNR01-1)では、アルツハイマー病のMRI, PET, 治療、遺伝子などのオーバービューが15分程度でなされ、アルツハイマー病における脳研究の最前線を把握することができて秀逸であった。そのほか、このセッションでは、SPRINT研究¹⁾(高血圧患者に対する降圧治療のランダム化比較試験)コホートでのresting state fMRIを用いた演題(SSNR01-3)や、内側側頭葉萎縮の視覚評価スケールを用いたメタアナリシスを行った演題(SSNR01-6)など

がなされた。

“Neuroradiology (Brain: Pediatrics and Epilepsy/Movement Disorders)” (SSNR02)のセッションでは、てんかん、神経変性疾患、小児に関する興味深い演題が多かった。特に、側頭葉てんかんに対する定位的レーザー温熱凝固療法後、発作消失群と非消失群のresting state fMRIによる機能的接続性パターンの違いに関する演題(SSNR02-1)や、進行性核上性麻痺患者を対象にdiffusion microstructure image²⁾を用いて上小脳脚や歯状核赤核視床路の微細構